

# 六 花 9



俳句雑誌りっか  
2017 (平成29年)  
cover design Yuna Mizuno

# 山田六甲

半 月

かん  
闇

焼あなご今宵多めに米磨いで

汗もつて汗を制しぬ咖喱飯

雲の峰湧立ついづもおほやしろ

火の山の地底に巨木涼しかり

縄文の杉息吹ある闇涼し

涼しさや花の色してロゼワイン

芋の葉の楯鉄壁の畝ひとつ

すず風や半月に雲ひとつなく

夜蟬鳴く白雲谷の湯明りに

いちぢくの風吹いてくる廃れ村

三瓶山埋没四千年杉

冷泉花

政子さんと主人逝去の報、月も半旗



割れ墓に灼けし銅銭二三つぶ

阿国の墓

暑氣中りなんば歩きのカメレオン

盆踊り石鎚山は海の神

水くぐる石水分け呑石鮎は錆び

夕立に老のたましひ濁りけり

長き夜へ夢の寝返り打ちにけり

切り分けて西と東に大西瓜

不二男作れる西瓜

滝音はバツハのматы受難曲

みんなに何か借りある気になりぬ

温泉ゆの山の片蔭に鳥地獄かな

雪嶺抄 万 緑 笹村 政子

万緑に覆はれみたる国境

万緑や人も獣も水を恋ひ

点るたび籤のまたたく螢籠

うたた寝の視界の中の水中花

島の灯のいつしかふえて籐寝椅子

嬰のもの取り忘れぬし夜の雷

縦の木の片面に蔦青葉かな

いにしへの風はこの色花菖蒲

花菖蒲水のやうなる風の音

七夕や母の願ひは知らぬまま

雪卿集 せつけいしゅう

天炎ゆる

佐津のぼる

万緑

藤生不二男

滝仰ぐ飛沫とどかぬところより

万緑や沢のぼりゆく青大将

梅雨晴間日差しに当てるバスマット

万緑や大甕に水満たされて

鷺発たせたる一陣の青田風

万緑や錠の下りたる映画館

食すすむ浅漬茄子の今朝の色

浮苗にさざなみ立てる植田かな

天炎ゆる昼はしづかに部屋ごもり

夏蝶のとどまりゐたる泥田かな

あぢさゐ

出口 誠

梅雨

永田万年青

あぢさゐの人の背丈を越えにけり

青梅雨や樹の活きいきと泰然と

あぢさゐの白から赤に染まりゆく

軒下の作業着ゆるる梅雨半ば

あぢさゐの白が青みをおびにけり

六月の夕風腕に広げけり

夏の蝶水飲みながら飛びにけり

万緑の中の昼餉を交換す

夏の蝶翼休める川の岸

万緑の洩れ日の中を坂下る

蓮巻葉

升田ヤス子

万緑のあはひポプラの絮降れる  
円座かな僧待つ堂の敷き瓦  
大甕に首出して蓮巻葉かな  
あげは蝶糸屋機屋の並ぶ辻  
青芝の穂のむらさきに雨催ひ

風車

志方 章子

芍薬の崩る間際も匂ひけり  
春の月木々の梢を流れけり  
風車回さば母のゐたる日々  
花筏破りし鯉の跳ねにけり  
札幌やリラの花咲く頃ならか

# 何事もなく父の日の終りけり 谷口 一献

なにごとくもなくちちのひのおわりけり たにぐちいつこん

万緑に運ばれし鳶声ひとつ  
雨やみて紫陽花に翹戻りけり  
息殺し死ぬ思ひして待つ蚩  
何事もなく父の日の終りけり  
父の日を祝へず二十三年目

父の日の行事も無事に終わったよ、というのではなく、誰からもメールもなく、プレゼントもなく、電話もなく終わって、淋しい気持ちがするよというのであろう。「便りのないのは元気な証拠」と夫婦で慰め合っているにちがいない。父の日は母の日と違ってまだまだ世間に認知されていない。子ども達が育ち盛りの頃、父は必至に仕事に打ち込んでいた。母親が父への感謝の気持ち子ども達に教え込まなかったせいもある。父とはそういう淋しい存在。「今夜は夫婦二人で父の日を一献祝うか」となるのである。



# 雪樹集

麦の秋

住田千代子

傘を打つ槐の花の音軽き

やはらかに肌刺す風や麦の秋

麦秋の中を迷うて帰りけり

みづいろの風を吹かしぬ楠若葉

万緑に包まれてゐるひとりかな

金亀子

田尻 勝子

五月晴れ昨夜の水滴滴つる森

金亀子花の真中に居眠りぬ

地に散りて薔薇の紅白雨の足

梅雨空の溶けて落ちるや鎖樋

牛蛙鳴いて隠沼波立てり

桑の実

廣畑 育子

暈

赤松有馬守破天龍正義

鳥除けの煌めき桑の実の熟るる

診療にもう行かなくちや梅雨に入る

アカシアの天に溢れてをりにけり

梅雨に入り満員電車遣り過ごす

首塚を彩つてゐる蛇莓

暈より伝つて来し梅雨の入り

石磴の両脇に露青々と

さつさつと緑の風の吹いてをり

黄金週間児の残しぬし蠟石絵

隠沼やあいろこいろに亀の鳴く

父の日

谷口 一献

万緑に運ばれし鳶声ひとつ  
雨やみて紫陽花に翅戻りけり  
息殺し死ぬ思ひして待つ蛍  
何事もなく父の日の終りけり  
父の日を祝へず二十三年目

牛蛙

溝渕 弘志

牛蛙松尾和子がゐてをりぬ  
海越えて飛んでみたいな揚羽蝶  
震災の石垣に咲く半夏生草  
夏の海洋酒ボトルが浮いてをり  
鮎皿に川の絵模様泳ぐ鮎

蓮

延川五十昭

蓮散りて葉に一片の残りけり  
山桃を籠いつぱいに拾ひけり  
白雲のこぼれ落ちたる蓮の露  
蓮池や白足袋履きし野良の猫  
白玉を抹茶に添へし喫茶室



# 蛍雪譚

六甲選

二十九年九月号鑑賞と随想

牛蛙松尾和子がゐてをりぬ 溝渕 弘志

牛蛙で松尾和子に連想が及ぶとは驚いた。が、よく考えてみると、牛蛙即ち低音、低音すなわちフランク永井すなわち「東京ナイトクラブ」のデュエット曲という順でのことと思われる。歌詞の内容と牛蛙ではイメージがかげ離れているが、人は時折、自分は今どうしてこのようなことを考えて居るんだらうと不思議な気持ちに陥ることがある。錯覚である。男女は何かの錯覚によつて恋に落ち、泥沼にもがき苦しむ。いわゆる生き地獄の世界だが、それでも死に地獄よりはいいものである。

蓮散りて葉に一片の残りけり 延川五十昭

蓮の花が散った。すべてが水面に落ちることなく、ひとひらだけ葉の上に残った。三蔵法師に出てくる仏の掌のように



である。落ちて水に還るも、葉にとどまって仏に護られるも、やがてはしおれて風前の灯火となつて消える。世の無常である。ひとひらの蓮の花弁に目を向けて簡潔に詠んだことによつて、様々な連想を呼ぶ深い句になつたのである。

六花集



平居 滯子

入梅や古墳の緑猛々し  
梅雨の墳濠を隔てて異界めく  
梅雨冷や安価な古書の蔵書印  
天皇陵夏至の夕日を引き込みぬ  
聖書開く泰山木の花の下

善野 焔

著莪咲くや水の匂ひの子規の庭  
子規庵の庭の藤には遅れたり  
開け放つ茶屋縦横に初夏の風  
蜷蛄の餌を離して落ちにけり  
万緑の中や畦塗る水の音